



2024 年

9 月 第 3・4・5 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 9 月 1 5 日 : マルコ福音書 8 : 1 - 1 0 .

『 感謝、祝福、分配 』

・ 9 月 2 2 日 : マルコ福音書 8 : 1 4 - 2 1 .

『 パン種の功罪 』

・ 9 月 2 9 日 : マルコ福音書 9 : 3 3 - 3 7 .

『 然るべき最高位 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

イエスの公生涯の2年目の春頃(=ヨハネ福音書6章4節)でしょうか、過越祭の直前にガリラヤ湖の東岸で五千人もの人々の空腹を満たしたエピソードが記録されています。さらに、その少し後にも、やはりガリラヤ湖の東岸で、今度は四千人もの人々の空腹を満たした記事が出ています。前回(五千人)は4福音書の全てに、今回はマルコ福音書とマタイ福音書にそれぞれ掲載されています。よく似たエピソードであるとは言え、時期がやや前後していること、さらに相違点が幾つかあり、これらの出来事が、別々のものであったことは間違いなさそうです。

さて、前回(五千人)のケースでは、群衆を解散させ帰宅させて、その後、己がじし食べ物を調達させることも一度は検討されました。しかし、今回(四千人)のケースでは、地理的にもまた体力的にも群衆は困窮している様子です。衰弱していく彼らを帰宅させるという選択肢は排除されます。イエスの弟子たちは、自らの空腹の問題ともあわせて打つ手がなく、進退窮まっています。

イエスはイエスで今回のケースが前回よりもはるかに深刻な事態であるとの認識を弟子たちと共有しています。21世紀に生きる私たちが近未来に味わうこととなる食糧危機の問題を、聖書が現代人に突き付けているかのようです。

さて、イエスは“前回”、弟子たちに対して、「あなた方が彼ら(群衆)に食べ物を与えなさい」と、先ずは命じました。彼らはこの命令には当惑した様子でしたが、所持していた僅少の備蓄(?!)の「パン五つと魚二匹」をイエスに差し出しました。

今回のケースでは「パンが七つと小魚少々」の備蓄(?!)しかありません。これだけでは群衆の腹を満たすことはできません。ただ、これも前回同様イエスに差し出されます。弟子たちの出来ることは、これが“全て”でした。人事を尽くして天命を待つにしては、尽くされた人事には限りがありました。しかし、ここからは神の“出る幕”です。

そこで、イエスは群衆に地面に座るように命じ、七つのパンを取り、

感謝してこれを裂き…また、小さい魚が少しあったので、祝福して、それも配るようにと言われた。（マルコ福音書 8：6…7）

聖餐式（＝聖体拝領）とよく似たイエスの“給食の奇跡”に、この時、弟子たちは前回同様、再び立ち会うこととなるのです。僅少なながらも、弟子たちは包み隠さず全ての携行食糧をなげうったのでした。神殿の献金箱にレプトン銅貨二枚を献げた寡婦の如く（マルコ福音書 12：42 他）。これらの食糧を元に、イエスは体力を消耗しきった群衆の空腹を満たしたのです。

さて、イエスは満たされた群衆を解散させた後、弟子たちと共に舟に乗ろうとすると、何処からともなくファリサイ派の人々が、イエスを試みるために近づいて来ます。「天からの徴を見せろ」と。遠目には手品のごとき給食の奇跡ではなく…。彼らは神キリストの救いの恵みよりも何よりも、天変地異を起こせば、お前の“超能力”を信じてやると言わんばかりです。イエスはここで、神に背く時代の輩を相手にすることはしませんでした。

さて、万難を排し舟に乗り込むと、弟子たちはまた空腹を覚えたのか、携行食糧のパンが不足していることに気づきます。するとイエスは、彼らの空腹を満たすよりも何よりも、先ほどイエスを試みようとしたファリサイ派の“パン種”には気を付けるようにと彼らを諭すのです。どんな“パン種”でも欲求を満たすことができるからなののでしょうか。

イエスが数千人の空腹を満たしたとき、数個しかなかったパンに神の奇跡の“パン種”が仕込まれ、これが“功”を奏して次から次へとパンが量産されたのかどうかの説明はありません。ただ、その後のイエスの譬えに出て来る警戒すべき「ファリサイ派のパン種とヘロデのパン種」が“罪障”の元となり、こちらも増殖してしまうと、今度は、人を“生かす”ための神の恵みとは真逆の結果（＝不信仰）をもたらすことになってしまいます。イエスはそのことを悟るようにと弟子たちに促したのでした。

《 然るべき最高位 》

使徒言行録の 1 章の、昇天“直前”のイエスと弟子たちの会話を思い起

こすと、彼らの“悟り”には、まだ深刻な誤解があったことが分かります。彼らはイエスにこう問うていたのでした。

主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか。（使徒言行録 1：6）

そんなことは「あなたがたの知るところではない」とイエスは一蹴します。これが復活後の“生身の”イエスと弟子たちとの最後の会話でした。

さて、今日の場面は、イエスの昇天の前年（頃）のことです。彼らはイエスがこの世を支配し「イスラエルのために国を建て直す」時の、彼ら弟子たちの個々の地位（序列）のことを、彼らだけで道々、密かに議論をしていたのです。彼らの野心は直ちにイエスに見抜かれます。愚かな人類の歴史を紐解くと、こうした議論が権力闘争に発展していったことは明らかです。イエスはもちろん彼らの拙い議論に加担することはありません。

いちばん先（上位）になりたい者は、全ての人の後になり、全ての人に仕える者になりなさい。（マルコ福音書 9：35）

イエスの命令は、浅はかな弟子たちにとっては到底、受け入れられるものではありません。その前に、イエスの“支配”なるものがそもそも、いつ、何処に、どのような仕組みで出現するのか、これに関する青写真も何も明かされません。雲をつかむような話です。けれども弟子たちの頭の中では愚劣な、この世の支配のイメージがそのまま先行していたようです。

さて、宗教改革者マルティン・ルターの著した“キリスト者の自由”の中に、このイエス・キリストの精神を正しく受け継ぐ言葉があります。

キリスト者は全ての者の上に立つ自由な主人であって、誰にも服しない。キリスト者は全ての者に仕える僕であって、誰にでも服する。

神キリストの本懐は 1500 年後のルターの宗教改革を経てやっと、少しずつ、キリスト教世界に浸透してゆくこととなったようです。